

「かちかち山」考—構造と主題

山 村 桃 子
(地域文化学科)

島根県立大学松江キャンパス
研 究 紀 要

第 58 号
(69~78頁)別刷
2019年3月

「かちかち山」考—構造と主題

山村 桃子

(地域文化学科)

The Structure and Thema of the Folktale
“Kachi-kachi-yama”

Momoko YAMAMURA

キーワード：かちかち山、山姥

Kachi-kachi-yama, Yamanba

はじめに

「かちかち山」は、人間と動物のかかわりを語る昔話であり、滝沢馬琴『燕石雑志』（1811年）所収の「兎の大手柄」によって広く流布する経緯をもつ。以下、話の概略を『日本昔話事典』⁽¹⁾によって示す。

爺が畑で豆を蒔くと、狸が石の上にすわって悪口を言う。爺は石の上にもちを塗っておき、狸を捕えて家の裏に縛ってぶらさげておく。狸は狸汁の仕度をしている婆に手伝うからと言って縄をとかせ、婆を殺して婆に化ける。畑から帰ってきた爺に、狸汁といつわって婆汁を食わせ、狸の正体をあらわして逃げる。爺が泣き悲しんでいるところへ兎が来て仇討を約束する。兎は狸と柴刈りに行き、狸に柴を背負わせて火をつける。次に火傷の葉だといって唐辛子を狸の背に塗る。最後に兎は木舟に乗り、狸は土船に乗る。土船が沈んで狸は死ぬというものが一般普及の型である。 (『日本昔話事典』)

本稿では、狸の登場から正体をあらわして逃げるまでの被害を被る部分を前半部とし、兎が登場し報

復を行う部分を後半部とする。

研究史において、本譚は複数の民話が複合して成立したことが指摘される。たとえば、前半部の狸には二つの性格があるとされる。爺に捕えられた頓間な性格から、婆を殺して調理するという狡猾な性格への変化である。これについて柳田國男は「一貫せざる性格」と評してその性格の不統一を指摘し、前半部と後半部は本来別個に語られ、それが結合されたものだとした⁽²⁾。

また主題について、前半部は人間の農耕生活にまつわる譚、後半部は動物同士の葛藤譚であるとされ、本譚には二つの異なる主題によって構成されるとする。その結合の動機は、「幼い聴衆の失望を慰むべく」(柳田)、「伝播に関与した座頭などの改変」(関敬吾)⁽³⁾、「伝承基盤の変質」(矢嶋泉)⁽⁴⁾とされる。

ここでの問題点は、本譚の構造と主題についての考察が、本譚の形成以前の段階の、前半部と後半部に分けて別個に捉えられていることである。仮に複数の話が繋げられたとしても、前半部と後半部が繋がり、統一体としてある現在の本譚の構造と主題については、なお検討の余地があるのではないか。

本稿では、狸の性格について一貫した性格をもつも

のと捉え、譚の形成過程をふまえながら、前半部と後半部が統一した主題と論理に基づく昔話であることを考察したい。

1. 「かちかち山」における農耕儀礼

まずはじめに本譚の研究史を簡単に振り返っておく。本譚の研究は柳田國男にはじまる。狸についての「一貫せざる性格」の原因は、「狸が持前の悪智慧と横着とを以て、厄難を脱したといふことを話の山にして居る。是を或農民の老夫婦が、いたづらな狸を生捕つたといふ話と繋ぎ付けただけに、主客顛倒の不調和が起つただけである。(中略)とにかくこの二つの狸話は、各々その部分だけで完結して居る」として、狸が厄難を脱した部分と、老夫婦が狸を生け捕った部分がそれぞれ別の話が接合されたものであることによるとする。

さらに、婆汁という悲惨な前半部の結末に対して、「幼い聴衆の失望を慰むべく、爺が泣いている處へ兎が訪ねて来て仇討を約束したといふ、渡廊下見たやうなものが發明せられた」として、「斯ういふ繋ぎ合せの起るよりも前から、所謂兎の大手柄を主とした昔話は、別に備はつて居た」とされた。

つまり柳田によると、現在の「かちかち山」は、狸が厄難を脱したという話（ここではaとする）、老夫婦が狸を生け捕ったという話（ここではbとする）、兎の仇討ちの話という三つの話が繋ぎ合わされたものとされる。

次に関敬吾氏は、「かちかち山」に関連する各地に伝承される民話をA、B、C（A+B）、D（B+C）、Eの五つに分類する。Aは爺の畑の場面から婆が婆汁にされるまでの譚、B型は兎と熊の冬囲いの萱刈りに始まり、熊が泥船によって沈むまでの譚、C型は現在のかちかち山に相当する譚、Dは兎が熊（狸）を騙して逃げる譚、Eは兎に尾がないことの起源譚である。

また本譚の主題について、関氏は「兎と狸（熊）の葛藤を中心とした動物叙事詩」であるとする。農民と動物の葛藤を主題とする譚前半の部分は、「兎の行為を合理化するために附加されたもの」とされ、そこに狸の性格の不統一の原因があるとされた。

さらに矢嶋泉氏は、本話を構成する要素はA B Eの三つであり、関氏が提示する「Bを基本要素として、A型と結合した」という説に対し、「A型の伝承基盤の変質がB型を要請して成立した」とする。A型が担うのは「不用意な、或いは過剰な自然の侵犯に対する戒め」の機能であり、農耕生活から異なる生活基盤への変化によって構造自体の意義が失われたために、B型が呼び込まれたとみるためである。

また柳田の、本譚がA型bを原型とし、A+Bへと展開したという説に対して、矢嶋氏は「A前半部と後半部とは等価構造をなす統一体であり、前半部冒頭に語られる「山畑」の耕作はA型昔話の重要な要素」であるため従えないとする。

このように、本譚の基本的要素（原型）をどこにみるかについて、柳田はA型b、関氏はB型、矢嶋氏はA型と、研究者によって異なりをみせる。本稿では、この矢嶋氏の説をふまえて、本譚の統一的主題が耕作にあることに着目して考察を行うことにしたい。

まず、本譚と同様の構造をもつ「瓜子姫」に着目する。「瓜子姫」は、女性（瓜子姫）が悪者（天邪鬼）によって喰われ悪者に報復するという、本譚と共通の筋をもち、結末部は本譚と結合する話のみられる⁽⁵⁾。

婆は川で瓜を拾う。瓜を割ると美しい女兒が生まれ、瓜子姫と名付ける。爺婆が出かける間、奥山から山母が来て、戸を開けると瓜子姫を取って喰う。山母は姫に化け、機を織ると爺婆が帰って来る。鶏が「糠屋の隅コを見ろじゃケケエロウ」と鳴く。瓜子姫を嫁に出すため馬に乗せると、鳥が「瓜子姫ば乗せねエで 山母乗せたア ガアガア」と鳴く。糠室の隅に行くと見ると、瓜子姫の骨があった。爺婆はまさかりで山母を斬り殺す。

（『聴耳草紙』104「瓜子姫子（その一）」⁽⁶⁾要約）

『紫波郡昔話』には、山ん婆が殺した瓜子姫を「小豆汁」の中に入れ爺と婆に食べさせるという、本譚の「婆汁」に対応する要素を持つ話が載る⁽⁷⁾。瓜

子姫の骨が棄てられた「糠屋の隅コ」の表現も、本譚において婆の骨が棄てられた次の「流しの下／釜の下」に共通する。

「狸汁、食うどて、婆汁食うたや、流しの下の
骨見っちゃ」

(『日本昔話大成1』⁽⁸⁾山形県酒田市)

「お爺は、婆あを食うた。釜の下の骨を見い」
(同 山口県大津郡)

こうした共通の筋をもつ両話は、どのような主題をもつのか。瓜は、日本でも古代から栽培された食物であり、「瓜子姫」の主題が畑作にあることを示唆する。また結末部では、次の例のように姫や天邪鬼の血によって蕎麦や黍、粟、薄、茅の茎が赤くなったという説明が付加されることも多い。

爺婆は気がつき（天邪鬼を）片足ずつ引き裂き片方は茅の中、片方は蕎麦の中へ投げ捨てる。
そのために茅と蕎麦の根は赤い。

(『大成1』広島県比婆郡)

蕎麦や粟、黍は農民の主食としての穀物であった。こうした耕作における残酷な死は、古代の神話においても語られるものであった。

阿用^{あよ}の郷。…古老伝へて云ひしく、昔、或る人、此処に山田を佃りて守りき。その時、目一つの鬼来^{たつく}て、佃る人の男を食ふ。その時、男の父母、竹原の中に隠れて居りき。時に、竹の葉動^{あよ}けり。その時、食はる男「動^{あよ}動^{あよ}」と云ひき。故^{あよ}れ、阿欲と云ふ。

(『出雲国風土記』大原郡阿用郷⁽⁹⁾)

田を耕作する男が鬼に喰われる。男の父母が竹原の中に隠れていると竹の葉が動き、喰われた男が「動^{あよ}動^{あよ}」と父母の居場所を告げる。阿用郷の地名起源譚としてあるこの神話は、男が田の耕作に伴う供犠としてあることを示している。とすれば、瓜子姫や本譚の婆も耕作における豊作と深く結びつく

供犠であったことが窺える。

本譚もまた、爺の耕作の場面から始まる。

一粒蒔けば千粒ウ 二粒蒔けば二千粒ウ

(『聴耳草紙』86⁽¹⁰⁾)

爺が「一粒蒔けば千粒」と唱えながら種を蒔くことは、播種の時期に行われる農耕儀礼と考えられる⁽¹¹⁾。それに対して、害獣としての狸に「一粒蒔けア一粒よ 二粒蒔けア二粒さ 北風吹いて元消べア」(同)と、不作の悪口を言い立てられるのは、爺の儀礼を帳消しにする呪言であり、ために爺は狸を生け捕りにする。

また、狸が石の上に腰掛け、爺が石の上に餅を塗るという行為についても留意される。柳田が「田の畦や畠の傍らの平たい石や伐株といふものには、元は是に腰かけて農作の成就を記念するといふ用途が、有つたのではないか」としたように、それらは農耕儀礼に関するものであったと考えられる。石の上に神なるものが宿するという「腰掛け岩」の伝説は広くみられ、祭祀の場であったと考えられている⁽¹²⁾。

このように、本譚は単に動物同士の葛藤のみを描くのではなく、その基底には、豊作祈願のための農耕儀礼がみとめられるといえる。

さて、矢嶋氏は、A型にB型が呼び込まれた理由について、「農耕生活から異なる生活基盤への変化」をその要因とみる。しかし、生活基盤に変化が生じなくとも、B型には移行し得るのではないか。

同様の供犠をもつ譚として、『出雲国風土記』意宇郡安来郷比売崎の条を参照したい。

かたりのおみあまろ
語 臣猪麻呂の女子、件の埼に追遙びて邂逅に
和尔に遇ひ、賊はえて販らざりき。

(『出雲国風土記』意宇郡安来郷)

ここでは海辺が舞台であり、女子は和尔(ワニザメ)に喰われる。和尔は神話において海の主たる存在であり、女子は海の豊漁に結びつく供犠としても考えられる。

しかし話はここで終わるのではなく、語匠猪麻呂による復讐譚が続く。神に祈り、百余の和爾が一匹の和爾を取り囲む。

鋒を挙げて中央なる一和爾を刃し殺し捕ること
已に訖へぬ。然して後、百余の和爾解散けき。
殺割けば、女子の一脛屠り出でき。仍りて和爾
をば、殺割きて串に掛け、路の垂に立てき。

(同)

神の力を得て、猪麻呂は和爾を殺害する。ここで海の主としての百余の和爾は猪麻呂の祈りを聞き届け、女子を殺した和爾の存在を示す。和爾はもはや供犠と引き換えに豊穰を約束する神として信じられることがない。

これらの二つの神話からも窺えるように、古代に成立した神話においても、理不尽な死のまま終わるもの、報復をするものの双方がみられる。前者は自然に運命を委ね、後者は自然の克服を試みる。前者に比して後者がより人間社会の論理に基づく話であることは明らかで、後者はより発展的であるだろう⁽¹³⁾。しかしそれはいずれも農業や漁業といった人々の生活基盤に根ざしており、そこに変化が生じなくとも、B型はA型と同時に成立し得たと考えられる。

2. 兎と狸

物語において、兎と狸は共に他者を欺く動物である。本譚において、兎と狸はそれぞれどのような意味を担うのか。

昔話に登場するウサギは、現在飼育されるイエウサギではなく、ノウサギであった。その兎の代表譚、稲羽の素兎譚では、海を渡ろうとした兎がわに（ワニとされる）を欺き報復を受ける。

海のわにを欺きて言ひしく、『吾と汝と、競べて、
族の多さ少なさを計らむと欲ふ。故、汝は其の
族の在りの随に、悉く率て、此の島より気多の
前に至るまで、皆列み伏し渡れ。爾くして、吾、
其の上を踏み、走りつつ読み度らむ。是に、吾

が族と孰れか多きを知らむ』といひき。如此言
ひしかば、欺かえて列み伏す時に、吾、其の上
を踏み、読み度り来て、今地に下りむとする時
に、吾が云はく、『汝は、我に欺かえぬ』と言
ひ竟るに、即ち最も端に伏せりしわに、我を捕
へて、悉く我が衣服を剥ぎき。

(『古事記』上巻⁽¹⁴⁾)

兎は「淤岐島」の兎であり、古来より日本全土に棲息するウサギに五種類ある中、隠岐固有種のオキノウサギがある。この兎は、隠岐から因幡へと渡ることを目的としてわにを「欺」く、狡猾な存在である。しかし、治療の方法を教示した大穴牟遲命に対して、兎は「此の八十神は、必ず八上比売を得じ。袋を負へども、汝が命、獲む」と告げる。稲羽の素兎は「今には菟神と謂ふ」とされて予言者の性格を有し、神として位置づけられる。兎は主に狩猟の対象であり、説話伝承等において語られることは少ないが、その神としての信仰は「島根県などでは山祭りの日には山の神が白兎に乗って山の木を数えて回ると言い、兎に対する古い信仰をうかがわせる」(『日本昔話事典』⁽¹⁵⁾)とあることと併せても窺える。本譚において、狸が悪者であるのに対して、兎が人の味方として位置づけられるのも、こうした兎の、狡猾な性格をもちながらも人に対する親和性をもつことに由縁すると考えられる。

また説話においては、人を騙す存在として「狐狸」の表現が散見する。以下は遊びに耽り学問をしない僧を改心させるため、虚空蔵菩薩が女になり代わって学問を勧める話である。

汝ガ今夜被謀タル事ハ、狐狸等ノ獣ノ為ニ被
謀ルニハ非ズ。我が謀タル事也。

(『今昔物語集』巻17-33⁽¹⁶⁾)

学問を身に付けた僧は、眠りから覚めると野原の中にいた。僧が寺に辿り着き、再び眠ると、その夢の中に虚空蔵菩薩が現れ、「おまえが今夜騙されたことは、狐狸らの仕業ではなく、自身が仕組んだことである」と告げた。ここでは、騙す者といえま

ず、狐や狸が考えられたことが示されている。『太平記』（巻十八）に「如何なる古狸・古狐なりとも、ばくる程ならばこれにや劣るべき」⁽¹⁷⁾とあることも同様である。

しかし柳田が「狐を狸に比べれば一層その魔力に怖ろしい所がある。最も例外もあるだらうけれど、概して言へば狸の方が怖ろしい所が少い」⁽¹⁸⁾と狐と狸の差異について言及し、狸より狐をより怖ろしいものとする事は注意される。

文献における狐の歴史は狸より古く、『日本書紀』（齊明紀5年）には「狐おのこほり えのよほろ、於宇郡の役丁の執れる葛かづらの末を噛み断ちて去ぬ」⁽¹⁹⁾とみえる。また、『日本霊異記』（上巻第二）には、野において男が美しい女に出会い、結婚し子が誕生した後、女の正体が狐と判明した話が載る。生まれた子は、「走ることの疾きこと鳥の飛ぶが如し」⁽²⁰⁾と常人ならざる力を有した。

また昔話においては、孫たちに化けた狐を法輪坊という者が暴いたが、狐らは五月に早乙女となって田植をし、秋になると八尺の稲穂が稔ったという譚がみえる（『江刺郡昔話』⁽²¹⁾）。

このような狐の神秘的性格を、狸は持つことがない。『和漢三才図会』には、狸は次のように記される。

按ずるに狸に数種有りて淡黒色…皆脚短く走り速からず。樹に登り甚だ早し。…老狸能く妖怪に変化し、狐と同じ。常に土穴に竄れて出でて果穀及び雞を盗み食う。猫と属を同じくす。故に之を野猫と名づく。或は腹を鼓ち自ら楽しむ、之を狸の腹鼓と謂ふ。

（『和漢三才図会』巻38獣類⁽²²⁾）

狐と比較して狸は足は短く体型もずんぐりしているため、走行に不向きといわれる。食物を盗み食らうことからは狡猾さ、腹鼓からは滑稽な性格が窺える。たとえば次の『宇治拾遺物語』の狸は、仏に化けて無知な聖を欺くが、思慮のある獵師によって殺される。

夜あけて、血をとめて行きて見ければ、一町ば

かり行きて、谷の底に大きな狸、胸より尖矢を射通されて死して伏せりけり。聖なれど、無智なれば、かように化かされるなり。獵師なれども、慮ありければ、狸を射害し、その化をあらはしけるなり。

（『宇治拾遺物語』巻第8-6⁽²³⁾）

化かした狸は矢で胸を射通されて死ぬ。人を騙す狡猾さを持ちながらも、真の知恵ある者によって見抜かれ、最後には命を落とす愚鈍さがある。『聴耳草紙』においても、狸が男あるいは女に化け、最後に正体を暴かれ叩き伏せられる譚がみとめられる⁽²⁴⁾。

こうした狸の譚をふまえれば、本譚の頓間かつ狡猾な狸の性格も一貫的でないとはいえず、むしろそれが説話伝承における狸の性格であるといえる。石の上で悪口を言うも爺に捕らえられる。婆を騙し殺して化けながらも、更に兎に騙されて殺される。本譚の狸は、こうした狡猾さと愚鈍さの反復によって語られるといえるだろう。

3. 山姥と狸

兎は、狸に薪を背負わせ、そこに火をつける。「あのかちかちという音は何の音か」と狸は尋ねると、兎は「あれはかちかち山のかちかち鳥だ」と答える。次第に火が回って燃え上がり、「あのぼうぼうという音は何の音か」と狸が尋ねると、兎は「あれは山のぼうぼう鳥」と答える。「かちかち」は「ぼうぼう」という音と共に、火が付けられ、燃え盛ることを表す。「かちかち」が鳥の鳴き声をあらわす例は、「いはれぬ鳴殿…飛つてかちかちかち啄く所を貝合にしっかりと喰しめ動かせず」（『国性爺合戦』）⁽²⁵⁾にみえる。

さて、この「かちかち」という擬音語は、次の牛方山姥譚にもみられる。

馬子が鱒を馬に負わせて山を越えていると、山姥が来て、鱒を食う。馬子は逃げて、山姥を退治するために山姥の家のあまだに隠れる。山姥が帰ってきて「あまだに寝ようか、釜に寝よう

か」といって釜に寝る。馬子が釜蓋の上に大きな石を載せて火打ち石で火をつける。山姥は「かちかち鳥が歌い出した」「ばんばん鳥が歌い出した」といいながら焼け死ぬ。

(『大成6』岡山県真庭郡)

「牛方山姥」においては、山姥は多く釜で寝て、火をつけられて焼き殺されるという結末を持つ。馬子が火打ち石により火をつける音と気づかず、山姥は「かちかち鳥」の鳴き声だろうと勘違いする。

このように、火を付ける音に気づかない狸と山姥の在りようは、両者の愚鈍さをあらわす共通的性格と考えられる。

山の神の零落した形とされる山姥は、狸と同様の所謂「一貫せざる性格」の持ち主であった。山姥譚の代表格である「牛方山姥」における山姥は、鯖や牛、果ては牛方までを次々と喰らおうとする前半部の残忍な性格に対し、後半部は牛方の唆しに騙されるという愚鈍、滑稽な性格を有する⁽²⁶⁾。

昔話において、山姥と狸は対応して現れることがある。たとえば「牛方山姥」の山姥は、煮殺されたり焼き殺された後に、狸となって発見される例がある。

馬子が蓋を取ってみると、大きな古い狸が耳まで口をさけて黒こげになって死んでいる。

(『大成6』広島県山県郡)

狸が悪戯をするので殺そうと思い、ある男が天井に隠れている。狸が婆に化けてきて、天井に寝ようかお釜に寝よか、そのこの下(床下)に寝よかというので、釜がよかろうというのとそのとおりにする。(『大成6』兵庫県氷上郡)

さらに「山姥の糸車」、「山姥と石餅(餅と白石)」にも、山姥の正体が狸であるという例がみられる。

橋のたもとの一軒家に婆が蠟燭をつけて糸車を回している。昼は家がない。狩人が行って撃つと弾をつかみ、弾が尽きると食われる。ある狩人が撃つと「今夜も一つこんころりん」といっ

て弾をつかむ。狩人はそばの火を撃つと呻き声がある。翌朝、古狸が死んでいる。

(『大成1』山梨県西八代郡)

このように、山姥が伝承において狸が化けたものであるとされるのは、両者が共に山に住む妖怪として性質の類似した存在と認識されていたことを示すのではないか。

異なる譚のあいだでも、山姥と狸には同様の行動がみられる。「婆汁」と「焼き石」、「陰囊／乳房」の要素である。

まず狸の婆汁については、「山姥山母に至っては、若く清らかな姫を切り刻んで、小豆汁にして爺と婆とに食べさせたなどと謂ふのである」(柳田『祭日考』)⁽²⁷⁾とあるように、山姥もまた姫を刻んだ小豆汁の伝承を有した。

次に焼き石について、老婆が石を焼いて焼餅と偽り、狸に抱かせて退治する例がある。

山の一軒家の婆のところに狸が来て騒ぐ。婆が川石を焼いて焼餅をやるといって抱かせる。門口に狸が焼け死んでいる。

(『大成7』大分県直入郡)

同様の方法で山姥もまた退治される。

焼き餅の好きな山姥がいる。里に来て餅をねだる。三郎兵衛という者が山姥を招いて小石を焼いて食べさせる。山姥は正月の餅は石にしてやるといって死ぬ。彼の家の餅はみな石になり、それからこの辺では祟りを恐れて正月に餅を搗かぬ。(『大成7』和歌山県日高郡)

狸と山姥が共に餅と石の違いに気づかないことは、火の音を聞いてかちかち鳥と錯誤することと同様であり、愚鈍な性格を示す部分といえる。

最後に陰囊と乳房についてである。狸の陰囊が八畳敷の広さにもなるという「狸の八畳敷」は有名である。『和漢三才図会』(同)には、「或いは山家に入りて爐邊に坐し、火に向かひて暖かに乗ずれば、

陰囊を延ぶること身より廣大なり」と、山家の炉端において火で温めることによって狸の陰囊が拡大すると記される。

婆が山小屋に一人で泊まっていると貉が来て前の皮を広げる婆は餅と石を焼いて自分は餅を食い、貉には焼け石をはさんでやると鞆丸の皮で包む。翌日死んでいる。百畳敷という。

(『大成7』岐阜県某地)

「山姥と石餅」においては山姥側にも同様の要素がみられる。

姉妹がむしろ打ちに行っていると山姥が来て乳を焚火で暖める。乳房をふくらまし姉をさらっていく。妹が浜ぐろう石を火で焼いて、山姥が来たので焼け石を投げ込む。山姥は石をからまいて逃げる。

(『大成7』長崎県下県郡)

このように狸と山姥は、共に陰囊と乳房が強調される存在であった。この陰囊・乳房は多産性を象徴するモチーフと考えられる。それは両者が豊穡を司る山の神としての性格をもつことに基づくのではないか。陰囊をもつ狸が山の神の男性的性格を、乳房をもつ山姥がその女性的性格を担っていると考えられる⁽²⁸⁾。

民俗学において山の神は田の神の性格を有していると考えられ、一年に十二の子を生むともいわれる、多産の性格をもつ。狸は一度の出産で平均四～六匹程度の子を生み、山姥もまた子育ての伝承を有していた。

山姥が子を生むという話は少なくとも室町時代の、京都にも既に行はれて居た。しかもをかしい事には一腹に三人も四人も、怖ろしい子を生むと謂ふのである。従ってそれが山神の産養ひといふ類の獵人等が言ひ伝へと、元は果して一つであるか否かも、容易に決断することは出来ぬのだが、山姥の信仰が今ほど雑駁になった上は致し方の無いことである。近世の山姥は一方

には極端に怖ろしく、鬼女とも名づくべき暴威を振りながら、他の一方では折々里に現れて祭を受け又幸福を授け、数々の平和な思ひ出を其土地に留めて居る。多くの山村では雪少なく冬の異常に暖かな場合に、ことしは山姥が産をすさうでと謂って居た。(柳田『山の人生』⁽²⁹⁾)

ここでは、山の中に女が入ると眠たくなり妊娠するという例、山の神の産衣として着物を献上するという例が挙げられ、かつて「山と女性又は山と産育といふが如き、一見して縁の遠さうな信仰」があったとする。一見残酷な面をみせる山姥は、その反面「一腹に三人も四人も」子を産み、幸いを授けたりという性格を有していた。

そもそも山姥とは、「ウバは本来権威ある女性の名」であり、「山姥も山の女神の、親しみある一つの呼び方であったかも知れぬ」(柳田『祭日考』⁽³⁰⁾)とあるように、身近に崇められた存在でもあった⁽³¹⁾。山姥のこうした二面性は、山姥が元來神——それは人間にとって吉をもたらすか凶をもたらすかわからない——であったことに基づくと考えられる。

翻って本譚では、播種の際に唱えた爺の「一粒時けば千粒」という豊作祈願に対し、狸は「一粒時けばア一粒よ」と不作の悪口を言い立て、婆を殺した。それは狸が、人間にとって正負の性格をもつ山姥の、負の側の性格を担う動物としてあらわれていることによるのではないか。そして山姥の正の側面を、本譚では次に登場する兎が担ったと考えられるのである。

4. 兎の知略

耕作する爺をからかい、婆を騙して殺し、婆に変装して爺を欺く狸は、人間を騙す凶悪な存在であった。その狸に代わって登場する兎は、婆を殺されて嘆き悲しむ爺に同情し、仇討ちを約束する。ここで兎は人間側に立ち、暴虐なる悪者を懲らしめようとする正義の役割を与えられている。

そもそも本譚の兎は、その元となった「兎と熊」のように熊を騙して殺す残忍なものであったとされ

る⁽³²⁾。

熊と兎が薪取りに行く。熊は鈍^{どんぼち}八で兎は賢しい。木を切っても、熊は多く取ったが兎はわずかに取り、背負う量も少ない。兎は歩かず、熊が兎の薪を背負い、しまいには兎まで背負って歩く。兎は火打ち石を切り、熊が訝しむと「あれはカチリ山のカチ鳥の声サ」と言い、火が服と、「あれはボウボウ山のボウボウ鳥コこさ」と答え、跳ね降りて逃げた。大火傷を負った熊は、「よくも俺を騙して火傷にしたな」と言うと、兎は「前山の兎は前山の兎、藤山の兎は藤山の兎、俺が何知るベサ」と答える。熊と兎は藤蔓を採って遊ぶ。山の頂上で兎が熊の手足を結び転がし、熊は大怪我をする。兎はタデ味噌を火傷に効くと言って熊の傷に塗り、熊は泣きながら体を洗う。兎は船を杉板で、熊は土船で作り、沈む熊を兎は竿で突いて殺す。

兎は熊を引き上げ熊汁にし、近所の家で子供達と一緒に食べる。兎は子供に親に骨を囁くよう伝え、大人は歯が欠けてしまい怒る。包丁を兎めがけて投げつけ、兎に尾がないという起源譚で終わる。 (『聴耳草紙』87 要約)

果たしてこの譚にみられるように、兎は残忍な性格をもつ動物なのだろうか。しかしここでの兎はひとり残酷なのではなく、「鈍八」な熊と「賢しい」兎と対照的な性格をもつ動物という枠組みの中で語られる。どこまでも愚鈍な熊に対し、兎は知略によってどこまでも騙そうとする。両者の性格的価値は同一である。

しかし、兎は人間の大人をも騙そうとするも、報復を受けて終わる。兎は熊を殺すことはあっても、人を殺す動物としては現れない。「拾い物の分配」において、他の動物と共に兎があらわれる例を参照する。

男の子が婆の家にぼた餅を届けに行く。途中で兎が見張り番をし、狐と狸が男の子をだましてぼた餅を取り上げる。ぼた餅の包みに入っている

手紙を兎は読めるふりをして「狐と狸は一つづつ、兎はみな食え」と書いてあるといてひとりでたくさんのぼた餅を食べる。

(『大成1』岐阜県郡上郡)

兎と狸と川獺とが昼寝しているところからだの不自由な人が塩と豆と小豆飯を担って来る。三疋でそれを取ろうと考え、兎がその人のまねをする。兎を追いかける。狸と川獺が持って逃げる。兎は大豆を取り、川獺には塩を、狸には小豆飯を持って松の木に登って食えといてやる。川獺と狸が兎をなじる。兎は豆の皮をからだにつけて腫れ物ができたと答える。

(同 福岡県築上郡)

前者の兎は人間の書いた手紙を読めるふりをして、狸と狐双方を騙す。後者の兎は、人の真似をして怒らせ、他の動物に食糧を盗ませながらも、最も得をする。ここでの兎は両者とも、他の動物に比べて最も人間に近い性格をもつ動物としてあらわれている。手紙の文字を読むふりをするという行動が示唆するように、その人間的性格とは知恵や理性といったものであろう。本譚においても、兎は木舟に乗り、狸は土船に乗る。兎は土と木の性質を知っており、土船が沈み、木船が浮かぶことを知っている。身軽ですばしこい生態的特徴と相俟って、兎は小賢しさ、要領のよさといった性質をもつ動物として、昔話に語られるのである。

こうした知恵があり俊敏な兎に対し、第2節で述べた愚かで足の遅い狸のあり方は対照的であった。本譚における狸は愚鈍なだけでなく、他者を欺く狡猾さを有していた。『宇治拾遺物語』における狸と獺師の関係の如く、狡猾・愚鈍な者は知恵ある者によって退治される。本譚は、「兎と熊」と同様に二匹の動物の対照性に基づき構成される一方、前半部から後半部にかけてはこうした命題に貫かれている。そこに「かちかち山」独自の構想があるといえるだろう。そしてまた通底するのは、前半部と後半部ともに農耕という主題である。前節では狸の繁殖能力の高さについて触れたが、兎もまた一度に六、七頭の子を分娩する多産の動物であった。

両者が互いに多産に関わる山の神的性格を有する動物でありながら、狸が兎に駆逐されるのは、二面的性格を有する山の神の、人間にとって残酷な面を狸が、そして人間に幸いを与える面を兎が担っているためではないか。山の神のみならず、神とは支配することのできない自然そのものであった。そうした自然との調和を保ち、田畑を平穏に営むことによって収穫はもたらされる。

最後に狸が、より人間に近い知能を有した動物である兎によって退治されることにより、自然は克服され、爺の願う豊作は約束されるのである。

おわりに

本譚の残酷さは、神話において同様の内容がみられたように、「瓜子姫」と並ぶ譚の古代的性格を示すものと考えられる。その主題は、冒頭の翁の言葉にみられる農耕儀礼にあった。同様に農耕儀礼の主題をもつ「瓜子姫」が、瓜から子が生まれるという異常誕生の話型をもつのに対し、本譚は動物葛藤という話型によって構成される。害獣としての狸と兎は、狸が人間に対する残酷性を、兎が人間に対する幸いを担った。そしてまた、愚鈍で狡猾な狸を、より人間的理性をもつ兎が退治することで、自然から文化への移行が象徴的に示されているといえる。

本譚前半部は害獣の捕獲から失敗を語り、人間社会の脅威としての自然が示された。後半部においては、より知恵ある動物が愚かな動物を退治することによって、知略による自然の克服が示された。このように前半部と後半部は密接に関わる。譚の来歴を辿れば、それはいくつかの譚の複合の可能性もあるだろう。しかしそうして形成された「かちかち山」もまた、統一した論理に貫かれた昔話としてあると考えることができるだろう。

-
- (1) 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編『日本昔話事典』「かちかち山」弘文堂 1994年
 (2) 『定本柳田國男集 第6巻』「昔話と文学」〈かちかち山〉筑摩書房 1968年

- (3) 関敬吾『昔話と笑話』「かちかち山の構造」岩崎美術社 1966年、また『日本昔話大成1』「勝々山」角川書店 1979年
 (4) 矢嶋泉「かちかち山」メモ—A型からC型へ—『青山語文』34 2004年3月
 (5) 『日本昔話大成3』（福島県耶麻郡）には、「川に赤と白の重箱が流れて来る。赤い重箱を拾って帰ると、瓜の中から女の子が生まれる。瓜姫御と名づける。天邪鬼が来て髪結び比べをして姫を負かし梨の木につるして殺し姫に化ける。殿様に嫁入りする途中で鳥が「瓜姫御の乗るかごさ、天邪鬼がぶじ乗った」と鳴く。天邪鬼が発見され「流しの下の骨見ろ」といって逃げる。兎が来て仇を討つ。かちかち山型」と記される。
 (6) 佐々木喜善『聴耳草紙』「104番 瓜子姫子」ちくま学芸文庫 2010年（初版1931年）
 (7) 柳田國男監修・小笠原謙吉採録『日本昔話記録1 岩手県紫波郡昔話集』三省堂 1973年（初版1942年）
 (8) 以下、『日本昔話大成』（角川書店）を『大成』とする。
 (9) 植垣節也校注・訳『新編日本古典文学全集 風土記』小学館 1997年
 (10) 佐々木喜善『聴耳草紙』「86番 兎の仇討」（同注6）
 (11) 徳島では、瓜を供えて豊作を祈願する瓜祈禱の風習もみられるという（『改訂新版 世界大百科事典』平凡社）。
 (12) 『日本昔話事典』「腰掛け岩」（同注1）
 (13) 後者は『古事記』の八岐大蛇退治も同様。
 (14) 山口佳紀・神野志隆光校注・訳『新編日本古典文学全集 古事記』小学館 1997年
 (15) 『日本昔話事典』「兎」（同注1）
 (16) 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳『新編日本古典文学全集 今昔物語集②』小学館 2000年
 (17) 長谷川端校注・訳『新編日本古典文学全集 太平記②』小学館 1996年
 (18) 『定本柳田國男集 第22巻』「狸のデモノロ

- ジー」筑摩書房 1970年
- (19) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳『新編日本古典文学全集 日本書紀③』小学館 1998年
- (20) 中田祝夫校注・訳『新編日本古典文学全集 日本霊異記』小学館 1995年
- (21) 佐々木喜善『江刺郡昔話』郷土研究社 1922年
- (22) 寺島良安『和漢三才圖會上』東京美術 1970年
- (23) 小林保治・増子和子校注・訳『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館 1996年
- (24) 佐々木喜善『聴耳草紙』「89番 狸の話」(同注6)
- (25) 『近松門左衛門集3』大橋正叔校注・訳「国性爺合戦」小学館 2000年
- (26) 『日本昔話事典』「牛方山姥」(同注1)には、「前半の牛馬までも食ってしまう山姥の恐ろしい性格に比して、後半ではただの婆になってしまい、滑稽なほどあっさりとな方の口車にのって殺されてしまう。このような、二面的性格の描写による笑話化は、昔話では往々にして認められる」とある。
- (27) 『定本柳田國男集 第11巻』「祭日考」〈耳の文学(一) 山姥の話〉筑摩書房 1969年
- (28) 両者の豊穡を司る性格は、餅のモチーフにもみることができる。「牛方山姥」には山姥が餅を焼いて食べる例がみられ、山姥は餅を好んだ。本譚においても、爺が石に餅を塗って狸を生け捕りにし、餅を搗く婆を狸が欺く場面があり、餅のモチーフが複数みられる。
- (29) 『定本柳田國男集 第4巻』「山の人生」筑摩書房 1963年
- (30) 『定本柳田國男集 第11巻』「祭日考」(同注27)
- (31) 『日本昔話事典』「山姥」(同注1)には、「人の子をさらって食べるなどといって恐れられる一方、折々には里に現われて人々に幸福を授け、神として崇められている。暮れや年頭の市の日に出現することはよく知られている。
- 山姥のこうした二面性は昔話にもうかがわれる。…外見の恐ろしさに反して意外に人なつこく、山小屋にもよく姿を現わすという。…山の神の零落したひとつの姿が、山姥だといえよう」と記される。
- (32) 『定本柳田國男集 第6巻』「昔話と文学」(同注2)
- (受稿 平成30年11月19日, 受理 平成30年12月25日)